

川端康成『花日記』論

——新「良妻賢母」像を体現する「なほみ」——

伊藤 輝

要旨

川端康成『花日記』は、これまで活発に研究されてきた作品とは言い難い。「代筆問題」では、『花日記』の作者が誰であるのかということに焦点が当てられ、「少女小説」に描かれる「エス」についての考察や、雑誌『少女の友』に登場する少女像についての研究では『花日記』は部分的にしか触れられていない。すなわち、『花日記』の内容や登場人物について詳細な研究はほとんどなされてこなかったと言える。

そのため本稿では、近代の高等女学校が目指した「良妻賢母」像を辿りながら、『花日記』の中心人物「なほみ」についてその少女像を探っていく。

キーワード：女子教育、良妻賢母、「なほみ」、自由、対等

一 はじめに

川端康成の『花日記』は、雑誌『少女の友』に昭和十三年四月号（第三十一巻第四号）から昭和十四年三月号（第三十二巻第三号）までの十二回にわたって連載された。挿絵は、当時雑誌『少女の友』の挿絵を担当していた中原淳一が施している。¹⁾

物語は、「なほみ」という官立女学校に通う少女が中心となつて展開する。幼い時に母親を亡くした「なほみ」は、姉「英子」を母親代わりにして育つ。「英子」が結婚を機に家を出ていくこととなり、「なほみ」は大きな喪失感を

覚える。

「英子」がかつて女学校時代につけていた日記を本人から譲り受けた「なほみ」は、その日記に「信子姉さま」が頻繁に登場することに気づく。「信子姉さま」は、「英子」と同じ「ミツシヨン・スクウル」に通う先輩であり、「英子」ととって「信子姉さま」は母親のいない悲しみを埋める存在だったのである。後日「なほみ」は、同級生同士の会話から「嘘のお姉さま」という言葉を聞き、「嘘の妹」を作ることを見つづける。

女学校の恒例行事である一泊二日の日光への修学旅行を辞退した「なほみ」は、学校で留守番をしている際に一年下の「綾子」と出会う。「綾子」が足の不自由な少女であることを知り、その後ろ姿に淋しさを感じ取った「なほみ」は、「綾子」を安心させたいという「お姉さま」じみた思いを抱くようになる。「なほみ」は、その思いを手紙で「綾子」に打ち明け、二人は晴れて友達になる。二人には嫌がらせをはじめとした様々な試練が降りかかるが、その試練を一つずつ乗り越え、「なほみ」と「綾子」は友情を深めていく。

その一方で、実の姉である「英子」は風邪を引き、床に伏しがちになってしまう。病状は少しずつ悪化し、ついに「英子」は親族に見守られながら息を引き取った。「その後

の始末」が一通り終わった後、「なほみ」は学校の校庭で「綾子」と共に「英子」を追慕する。

二 先行研究

『花日記』の先行研究は大きく三つに分けられる。一つ目が「代筆問題」、二つ目が「(エス)の世界」について、三つ目が「少女の友」の少女像に関する研究である。三つ目は、雑誌『少女の友』に関する研究であり、『花日記』のみに焦点を当てたものとは言えないが、『花日記』を分析する上では貴重な研究であると考えられる。順にその内容を見ていく。

はじめに、『花日記』の「代筆問題」についてである。『川端康成全集 補巻二』を見ると、中里恒子から川端康成へ向けて次の内容の手紙が送られていることが分かる。

けふ少女之友^(マユ)買ひ、花日記にかかります。これは自分で書いてゐてたのしみです。勿論虚構の人物ですけれどその人物に私の思つてゐることをみんなさせてゐるせいかもしれませぬ^(マユ)。

中里恒子はこの手紙で、川端康成に『花日記』の執筆に

取り掛かることを告げている。また、同年九月二十五日には川端康成から中里恒子にあてて「原稿拝受。」と書かれた手紙が送られている。

孫英・金明哲は『花日記』の代筆疑惑について「文章から抽出した文字・記号の bigram、形態素タグの bigram、文節パターン」からその特徴を割り出し、本作品の代筆疑惑の解明に着手している。分析結果は、「各文体特徴量の判別結果から、文字・記号の bigram では川端康成に近い文体、形態素タグの bigram では中里恒子に近い文体、文節パターンでは川端康成と中里恒子のどちらの特徴も同程度を有する文体」となり、『花日記』は川端康成と中里恒子の共同執筆」というのが孫・金両氏が導き出した結論である。

次に、「(エス)の世界」についてである。大森郁之助は、川端康成の「少女小説」の「(エス)の世界」について考察している。「エス」について大森は、「シスターの頭文字」であり、「実際の旧制女学校生徒間の同性愛めいた交際」と説明している。大森の主張は以下の通りである。

もつとも、エス小説の長編というのはそう多くなくて、短編では同一人物の二態は盛り込み易くはないから、自ずと実例は少なくなるが、「花日記」では、かなり、

に、「お姉さま」的でもあった実姉が嫁いで行ってしまった淋しさから、残された妹は学校で下級生の「妹」を求める。

上方に生じた空白を下方で埋めようというのはあまり判り易くないが、じつはこの実姉も、早く母を失ったため「幼い頃から、(妹)に対して、母の代わりの)姉の心を持って育ってきた」「お姉さまに甘えることは知らなかった」という「上方空白」感の自覚があり、女学校入学早々に現れた上級生に急速に心を寄せて行った過去を持つ。つまり実姉は、女学校低学年において学校では「妹」、家庭では姉かつ「姉」という、同時二役の時期を持ったわけだが、前述その妹の「妹」捜しには、実姉の古い日記によって「嘘の」姉・妹」というものに目を開かされたことも作用していた。

ここで大森は、姉「英子」が女学校時代に上級生を通して「上方空白」を埋めていたことを指摘する。しかし、妹「なほみ」については、「実姉の古い日記によって「嘘の」姉・妹」というものに目を開かされた」という言及に留まっている。

また、大森は同論文の中で、「エス」を描く作品につい

て「時間的決着はやや侘びし」く、女学校の「卒業（多くは、一方の）」というセミコロンが、おおむね、ピリオド」となることを指摘した上で、『花日記』について次のように述べている。

しかし「花日記」では、「妹」を得たばかりの女学校二年の女主人公でさえ、「嘘の」という冠称に象徴されるように「女学校の『姉妹ごっこ』」はお嫁入りする頃には「卒業」しているもの、という、醒めた認識を持つているし、げんに実姉も、そのことを綴った日記は保存していたものの、かつての（お姉さま）のその後の消息は全く知らないものようである。⁸

ここから、『花日記』に登場する「英子」や「なほみ」が「醒めた認識を持って」「嘘の」「姉妹ごっこ」をしているという大森の主張が読み取れる。

最後に、『少女の友』の少女像』に関する研究である。今田絵里香は雑誌『少女の友』に登場する「少女像』について分析している。その中で、『花日記』の連載時期と重なる「昭和初期・昭和2～14年（1927～1939年）」については、「自由と自己実現を謳歌する少女」と題した。⁹その上で、「自主性」と「個人主義」を志向する「自

己実現タイプ」の出現頻度が圧倒的に高くなっている」ことを指摘する。¹⁰ここでいう「自主性」について今田は、「知識や能力をいかし、自分の行動を決定する」、「あるいは実際に決定していなくてもそのような志向をもつ」とし、また「個人主義」を「家族や国家、地域社会よりも、自分の利益を優先させる」、「自分の利益を追求したり、自分の利益のために行動している」、「あるいはそのような志向をもつ」と定めている。¹¹今田はこの定義をもとにして、『花日記』を「自主性」と「個人主義」を志向する少女が登場する作品に分類した。¹²加えて、今田はこのような「自由と自己実現を謳歌する少女」像について、「女子教育論で語られた良妻賢母像とは、まったく結びつかないものであり、むしろ、それを打ち破るようなものではない」と述べている。¹³

本稿では、これまでの先行研究ではなかなか触れられることのなかった『花日記』の作品内容そのものに焦点をあてた考察をしていきたい。『花日記』の中心人物である「なほみ」が「官立女学校」に通う女学生であることから、はじめに近代の高等女学校の教育における「良妻賢母」像を明らかにしていく。その上で、『花日記』が執筆された昭和十年代前半に焦点を絞りながら、高等女学校の女子教育の変遷を辿る。これらを踏まえて、本作品における「なほ

み」がどのような少女として登場しているのかを、当時の社会状況と重ね合わせながら見ていきたい。

三 「女子教育論で語られた良妻賢母像」とは

(一) 国家が求める「良妻賢母」像

今田絵里香が指摘する「女子教育論で語られた良妻賢母像」とはいったい何なのか。初めに、一八九九（明治三十二年）に公布された高等女学校令、そして一九二〇（大正九）年の高等女学校令の改正から、当時の高等女学校の教育が何を目指していたのかを見ていきたい。

一八九九年に公布された高等女学校令については、文部科学省のウェブサイト『学制百年史 資料編』にある解説から一部引用する。解説の内容は次の通りである。

高等女学校の目的は、「女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為ス」と定めたように、中学校の高等普通教育と同様な概念でその目標を示すこととした。しかし、女子中等教育機関のほとんどすべてが、高等女学校であつて、男子のように実業教育の制度と高等普通教育の制度とを並立させる形としなかつたために、高等女学校独自の方針を採用できた。高等女学校令制定について

樺山文相は、三十二年七月の地方視学官会議において、女子高等普通教育に関して次のように説明した。高等女学校は「賢母良妻タラシムルノ素養ヲ為スニ在リ、故ニ優美高尚ノ氣風、温良貞淑ノ資性ヲ涵養スルト俱ニ中人以上ノ生活ニ必須ナル學術技芸ヲ知得セシメンコトヲ要ス。」¹⁴ここでは、女子の高等普通教育が中流以上の社会の女子の教育であり、その特質がいわゆるのちの「良妻賢母主義」の教育にあることを明らかにしていた。

ここから、当時の文部大臣である樺山資紀が高等女学校設置の目的として、「賢母良妻」になるための「素養」を女学生に身に付けさせるための教育を施すことを主張していることが分かる。この目的を達成するため、女学生の「優美高尚ノ氣風」、「温良貞淑ノ資性」を養うことを説いているのである。

この高等女学校令は、一九二〇（大正九）年に条文が一部改正された。本稿では、文部科学省のウェブサイト『学制百年史 資料編』より、「高等女学校令中改正（大正九年七月六日勅令第百九十九号）」の第一条を引用する。

第一条 高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ

為スヲ以テ目的トシ特ニ国民道德ノ養成ニ力
メ婦徳ノ涵養ニ留意スヘキモノトス¹⁵

水野真知子は、この条文の改正について一九二〇年六月二十三日の枢密院会議において「政府原案に「婦徳」以下の修正が加えられた」ことを指摘している。¹⁶

なぜ、「婦徳ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」という言葉が付け加えられたのか。小山静子は、当時の良妻賢母思想について次のように述べている。

しかしながら実際には、相変わらずの、裁縫に代表される単なる家事能力や、従順さなどの婦徳を身につけた女性に対する期待感が高く、思想と現実との間にはズレが存在していた。ところが大正期に入ると、第一次大戦の影響や女をめぐる状況の流動化のなかで、古来の女性観に対する不満の声が大きくなっていく。そしてこの時代の動きに対応した新しい女性規範が求められ始め、良妻賢母思想は再編されていく。つまり、一方では潜在的能力を開発し、活動力や積極性をそなえた女性を育成していくことを目指し、他方では従来¹⁷の性別役割分業を温存しつつ、女性の「男性化」を避ける、という課題が追及されていったのである。

小山の指摘から、女性の「婦徳」が「従順さなど」にあること、そして当時の良妻賢母思想が一方では「活動力や積極性をそなえた女性」の育成を目指しながらも、他方では「従来の性別役割分業を温存しつつ、女性の「男性化」を避ける」という矛盾した二つの考えを有していたことが分かる。ここから、大正九年に公布された高等女学校令中改正にある「婦徳ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」という文言が、「従来の性別役割分業を温存しつつ、女性の「男性化」を避ける」という意味を補うために付け加えられたものであることが推測できる。

以上の内容から、高等女学校は「女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為ス」という目的のもと、「優美高尚ノ氣風」、「良貞淑ノ資性」に加え、「従順さなどの婦徳」を養った「良妻賢母」となるための教育を施す機関として定義づけられていたことが分かる。このような定義や方針はあくまで高等女学校令を公布した政府によって形成されていったと言える。すなわち、この定義や方針には、実際に教育を受ける女学生や教育現場で働く教師たちの考え以上に、国家としての目的や国家が理想とする女性像が先行しているのだ。

(二) 女子教育改革運動の隆盛と退潮

では、実際の教育現場は高等女学校における女子教育についてどのような目的や方針を持っていたのか。高等女学校の教育については、一九二〇（大正九）年に設立された全国高等女学校長協会（以下、同協会）を中心に検討がなされ、文部省が主催する会議を通して改善が図られていったようである。同協会は、実際の教育現場における問題の改善を図り、高等女学校の教育を学力重視の方向へと導いていった。この運動の最前線に立っていたのが、当時協会の理事長を務めていた市川源三（東京府立第一高等女学校長）である。市川の牽引のもと、一九二〇年代から三〇年代前半まで女子教育改革運動が活発になっていく。¹⁸

しかし、水野真知子は一九三四（昭和九）年以後の女子教育改革運動の動向を「近代日本女子教育史」の「第六」の時期にあたるとした上で、次のように述べている。

第六は、一九三四（昭和九）年末から一九三五（昭和十）年にかけて、全国高等女学校長協会の主導者市川源三の主唱「新良妻賢母主義」が東京府議会において論難的とされ、ついには辞職に追い込まれていったことに象徴されるように、それまでの改革潮流が急速にその流れを変え、後退していった時期。この時期

に、教育審議会委員の内に初めて限定的な形ではあれ、高等女学校長が連なり、女子教育改革提言の上に、答申という形で根本的な問題であった女子の教育系統が初めて政策課題の俎上に載せられた。しかし、同時に教育改革そのものが、日中戦争・太平洋戦争へとなだれ込む総力戦体制の渦の中に併呑されていった時期でもある。¹⁹

水野は、著書の中で「近代日本女子教育史」を全部で七つの時期に分類している。その中でも女子教育改革運動の「後退」の時期にあたるのが一九三四（昭和九）年末以降なのだ。その象徴が「現代女性読本」事件であり、市川の著書は「教育上不穩当」とみなされ、辞職に追い込まれた。²⁰

市川は著書『現代女性読本』の中で、従来の「良妻賢母」主義について「恐らく良妻は良嫁の義であり、賢母は英雄主義のそれであつたらう」と述べている。市川がここで言う「良嫁」とは、夫よりも舅や姑に尽くす女性のことを指している。また「古い良妻主義」について、「妻」を「夫の従者と」とし、「夫が凡庸であらうと、これを天の如く尊敬」し、「子女を誡めて正しい道に向はせ」なければならぬとしていることを指摘し、「所謂英雄主義で、一般的なも

のではなく、特殊なものである。」とした。⁽²⁾その上で、次のような「新良妻賢母主義」を唱えている。

新しい意味では良妻といへば、夫のよい協力者といふ意味である。その時夫とは対等の関係にある。夫のよいことはこれを勧め、悪いことはこれを止めるだけの見識と熱意とを有つている妻である。これだけの妻であれば、我が子の育児・教育が合理的になし得られるし、我が子の人格の芽生えを啓培することも出来る。男女同格夫婦対等であつて始めて、賢母と良妻との二語が結び付くのである。⁽²⁾

この後市川は、「良妻と賢母との務め、どちらも片手間なく儘し得ることはむつかしい」、「良妻と賢母とは依然として結びつきにくい」としながら、「女が良妻賢母たり得る為には、男も夫として妻を愛すると共に、親として子供を大切に思ふやう心掛けねばならぬ。」と述べている。⁽²⁾すなわち、市川源三は著書『現代女性読本』の中で仮に「良妻」と「賢母」を結びつけるならば、「男女同格夫婦対等」でなければならぬとし、従来の「良妻賢母」思想がもはや現代には通用しないことを指摘しているのである。

この市川の主張に対して、東京府会で激しい非難の声が

あがった。東京府会は、現在の東京都議会の前身である。初めて東京府会が開催されたのは一八七九年のことであり、それから一九四三年に東京府が東京都へと変更する時まで、東京府会という名称で議会が開催されていた。⁽²⁾水野真知子は、『昭和九年 東京府会議事速記録』での濱野清吾、家人経晴議員らと香坂昌康東京府知事の応酬をもとにしながら、非難の内容について次のように述べている。

だが、濱野清吾、家人経晴等による攻撃は「英雄主義」「良嫁主義」という部分に向けられた。濱野、家人等の論拠は、同書の「殆ど個人主義ヲ以テ終始シテ」「日本ノ家族主義ト云フヤウナコトニ付テハ一点ノ書イタ所ハナイ」「而モ女性ノ女ノ向上發展ト言フコトヲ書イテ居ル」、それは「國家ノ基本ヲ揺動カスベキ記事」であるというものであった。⁽²⁾

すなわち、市川が日本の家族主義を無視し、従来の「良妻賢母」思想を非難した上で、女性の向上や發展を説いていることが不適切であるとみなされたのである。

この事件からは、高等女学校の教育における「良妻賢母」像が国家の基本となる「家族主義」や従来の「良妻賢母」像からの逸脱を許さないものであることが分かる。すなわ

ち、女性の発展は許容されるが、妻として夫に尽くし、そして母として子供に尽くすことを蔑ろにして成立はしないという考えが浮かび上がってくる。ここに、女性の発展があくまで妻や母としての役割の向上にあることが読み取れる。

この議論の後の市川源三をはじめとした女子教育改革運動について水野は、市川源三は「一九三五年六月、ついに辞職に追い込まれる」が、同年九月に私立鷗友学園高等学校の校長として迎えられ、それにもなつて「全国高等女学校長協会の事務所も鷗友学園に移された」と述べている^②。すなわち、市川源三が牽引する女子教育改革運動は、拠点を変えて活動を継続していたのである。しかし、高等女学校の女子教育は彼らの理想としていたものとは異なつた方向へと進んでいく。その点について、水野は次のように述べている。

しかしながら、客観的状态として、一九三八（昭和十三）年全国高等女学校長会議の議場を席捲したのは文相荒木の訓示であり、そこに顕現されていたのは日本婦道に貫かれた復古的とも言うべき女子教育観であった。この頃より、参加した高等女学校校長の間からも「従来の教育は知育偏重である」と学力重視の女子

高等普通教育のあり方を批判する声が大勢を占めるようになっていった。同年の会議においては、早くも「集団勤労作業」の制度化が重要課題として打ち出されていた。そして、翌一九三九（昭和十四）年の全国高等女学校長会議においては、教育審議会の女子中学校案に真っ向から反対する高等女学校長さえも立ち現れるようになっていったのである^②。

ここから、一九三八（昭和十三）年以降の女子教育が、従来の「良妻賢母」像へと回帰していくことが分かる。すなわちこの時期から、一八九九（明治三十二年）に高等女学校令が公布された際に樺山資紀が提唱した「優美高尚」や「温良貞淑」な「良妻賢母」に、一九二〇（大正九）年の高等女学校令の改正によって付け加えられた「婦徳」を兼ね備えた「良妻賢母」の育成が活発になされていったことが推測できる。このような時期に書かれたのが、川端康成『花日記』なのである。

四 『花日記』の中心人物「なほみ」

次に、『花日記』の中心人物「なほみ」の性格について四つの特徴に分けて分析する。

(一) 「氣の勝つた、理性的な」性格

「なほみ」の性格について、作中では「氣の勝つた、理性的な性質」（「花日記」「姉嫁ぐ」、一九九頁）とされている。「氣の勝つた、理性的な」様子については、「なほみ」が同級生から受けた「嫌がらせ」の事実を、友人の「清子」に打ち明ける次の場面から読み取ることが出来る。

「あたしね、いつかも話したでせう。足のわるい、氣の毒な綾子さんのこと……。あのひとを一度、送つて行つたのよ。そしたら、早速その翌る日、回り道するとか、親しさを押し付けるとか、いやな文句の手紙が、お机に入れてあるのよ。」

「署名してないの?」

「勿論よ。」

と、なほみは顔を真直ぐ上げて、

「あたし、ちつとも自分のしたことを、汚いとは思はないの。だから平気だけれど、さういふこととして、あたしを嫌がらせて、喜んでるひとがあるだらうと思ふとくやしいの。なんのために、そんなことするの?」

（「花日記」「六唱歌会」、二七八頁）

この後清子は、「嫌がらせ」の犯人が「なほみ」の後に「綾子」と友達になることを悔しがり、「なほみ」にあたることで恨みを晴らしているのだと助言する。この清子の助言の後、「なほみ」は「清子」と次のような会話をする。

「さう? なんて可哀想なひとでせうね。もつと正々堂々と、ぶつかつて来ればいいのに。きつと、氣が弱いね。」

「さうよ、さうだわ。だから、なほみさん、クラス中を敵と思つたりしないで、むしろ、そのひとに同情すべきよ。——なほみさんの勝ちなんだから。かうして、えらさうなことが言へるのは、しあはせよ。」

「しあはせには、争ひや戦ひがつきものね。」

「さうよ。眠つてる間に、しあはせが授かつてるなんてことは、まあないわね。」

「それなら、それでいいわ。」

（「花日記」「六唱歌会」、二七九頁）

この場面からは「なほみ」の氣の強さ、そして「綾子」との友情を守るため戦いを決意する様子を読み取ることが出来る。また、「なほみ」は「嫌がらせ」の動機について理解できないことを「清子」に主張し、怒りに身を任せる

のではなく、あくまで冷静に物事を捉えようとしていることが分かる。すなわちこの場面は、「嫌がらせ」の犯人の気の弱さと「なほみ」の気の強さが見事に対比し強調されているながら、「なほみ」の「理性的」な性格が窺える場面なのである。

(二) 自由な言動

「気の勝つた、理性的な性質」以外に、「なほみ」の性格はどのように表現されているのか。まず論者が注目すべきだと考えた点は、「なほみ」の自由な言動である。次に引用する「なほみ」と父親の会話からその様子が見てとれる。以下、「なほみ」が父親に「英子」の「里帰り」を提案する場面である。

「ねえ、お父さま、松やの藪入みたいに、お嫁さんの藪入りもあるといいわね。」

「お里帰りかい。」

「ええ、泊りがけで——。」

「そんなことだめだよ。お嫁さんといふものは、女中とちがつて、もう向うの家の人になつてしまふことなのだから、お嫁に行つた家以外に、家はないわけだ。それなのに、その大事な家をあけて、泊りになんか、

なかなか来られはしないな。向うの家の仏さまを、お迎へしなければならぬしね。」

「あらア、そんなことないわ。自分の生れた家へ来るのですもの。自分を産んで下さつたお母さまが、帰つてらつしやるといふんですもの。」

「さうか。ぢやあ、ひとつ兄さんを承知させるんだな。」
「ええ。あたし、名文を振ふわ。」

(『花日記』「六唱歌会」、二八八頁)

この会話の後、「なほみ」は「英子」に長文の手紙を送り、義理の兄を説得して姉の「里帰り」を実現する。これまでのしきたりから「英子」の「里帰り」を禁止する父親に対して、「なほみ」は姉の「里帰り」の正当性を突き付けている。ここからは、「なほみ」が古いしきたりに縛られない自由な発想を持ち合わせ、主張する少女であることが分かる。

(三) 対等な関係の創造

自由な言動を取る一方で、「なほみ」は家族や友人と接する時に対等な関係の構築を図ろうとする。先ほど引用した「なほみ」と父親の会話の様子からも明らかのように、「なほみ」と父親の関係は口答えの許されない上下関係とは明

らかに異なっている。「なほみ」の父親は「なほみ」の自由な発言を否定せず容認している。そのことよって、「なほみ」は父親に対して自分の意見を率直に伝えることが可能となる。「なほみ」と「なほみ」の父親の間には、父親による抑圧がまるで見受けられないのである。ここから、二人の関係が対等に近いものであることが分かる。

このような家庭環境で生活する「なほみ」は、友人に対してどのようなように接しているのか。「なほみ」は「綾子」に向けて書いた手紙の中で、次のように綴っている。

綾子さんがもしも、御自分のお体のことで、気を弱くなさつたりするやうでしたら、それはみんな、あなたのお考へちがひよ。あなたは、今のままで、決して恥しくはないのよ。どうぞそんなことで、お友達を作らうとなさならなかつたりしないやうに。

そして、いつも明るく威張つてゐていいのよ。

そして、もしさういふ悲しい気持ちになつたら、どうぞ、イの一番に、あたしを選んで下さいね。あたしはもう、あなたのこの上ないお友達のもりであるのですけれど、あなたはそれを認めて下さる？

あたしは、ただ、あなたをもつと深く知りたいのよ。そして、あたしも知つていただきたいの。

そしてこの気持は、ちつともあなたの御様子などに、関係してゐませんわ。

あなたが今のままで、御自分をもつと大事にして、強くなつて下さつたら、どんなに美しいでせう。あたしに出来るなら、いくらでも、あなたのお手伝ひをしましてよ。

ね、綾子さんの明るい日々を築くために、あたしを役立てていただけなくつて？

では、こちらを向いて頂戴！

綾子さま

なほみ

〔「花日記」「四うしろすがた」、二四五～二四六頁〕

この手紙の内容からは、「綾子」とは障害など関係なく、対等な友達になりたいという「なほみ」の気持ちが窺える。「綾子」は、足の障害を引け目に感じている。しかし、それは「決して恥し」いことではなく、障害を理由にして友達を作らうとしないのは「考えちがひ」であるというのが「なほみ」の主張である。このような主張を「なほみ」がするのは、「なほみ」にとつて障害の有無が、対等な人間関係の構築を遮る要素ではないからだ。

以上のことから、「なほみ」が家族だけでなく、障害を持つた友人に対しても対等な関係を築こうとする価値観を持つ

た少女であることが分かる。

(四) 「嘘の」姉妹と「ほんたうの」姉妹

ここでは、「なほみ」が「嘘の」姉妹関係をどのよう
捉えているのか考察するため、次の発言を見ていきたい。

「英子姉さまは、早くからあたしのお母さま代りに
なつて、そりやあたしを可愛がつて下さつたの。さう
して、いつもあたしを庇ふ立場になつて、御自分のこ
となんか忘れるくらゐだつたの。でも、少女の頃のお
姉さまには、さういふお母さまじみた暮しが、さみし
い時も随分あつたんでせう。——自分にも、お姉さま
が欲しいと思ふやうになつたんでせう。さうして、い
つの間にか、英子姉さまのあこがれるやうなお姉さま
が、学校のなかにはいらしたのよ。つまり、嘘のお姉さ
まなんだけれど、ほんたうは嘘ぢやないのよ。分るか
しら、こんなお話。」

〔「花日記」「七夏の家」、二九五―二九六頁〕

この「なほみ」の発言は、「二 先行研究」で紹介した
大森の主張、すなわち「なほみ」が「醒めた認識を持って」
「嘘の」「姉妹ごっこ」をしているという考えを覆すもの

ではないだろうか。「嘘の」姉妹、血のつながりのない虚
構の姉妹について「なほみ」が「醒めた認識」を持って
いたとは到底感じ得ない。むしろ、「なほみ」にとつて「嘘の」
という言葉は血縁関係のないという意味を表す表現にすぎ
ないのである。「なほみ」は「綾子」のことを家族と同じ
位大切に考えていると捉えるのが妥当なのではないだろう
か。

これまで挙げてきた「なほみ」の性格や考えを総合する
と、「なほみ」は気が強い性格で、その上自由な発想を持っ
て行動していることが分かる。また、家族や友人と対等な
関係を築こうとし、「嘘の」姉妹を家族のように大切に思っ
ている、そんな少女だと言える。

五 新「良妻賢母」像を体现する「なほみ」

以上のことから、「なほみ」の性格と当時の女子教育で
求められていた「良妻賢母」像を比較するとどうなるのか。
「なほみ」の言動からは、樺山資紀が「良妻賢母」の条件
として提唱した「優美高尚」や「温良貞淑」の言葉からイ
メージされる上品さや穏やかさよりも、活発さや自由奔放
なイメージが想起される。加えて、小山静子が示した「婦

徳」の条件である「従順」な様子はあまり見受けられない。ここから、「なほみ」が当時の女子教育で求められていた「良妻賢母」像とは異なる少女のイメージを有していることが分かる。

ただ、「なほみ」は女子教育が求めていた「良妻賢母」像とはたしかにイメージが異なっているもの、完全に「良妻賢母」像からかけ離れているとは必ずしも言い切れない。「なほみ」は、「良妻賢母」の育成を図るという目的を持った官立女学校に通い、「良妻賢母」になるための教育を受けている。そのため、完全に「良妻賢母」という枠組みから逸脱しているとは言い難いのである。ここから、「なほみ」が「良妻賢母」になるための教育を施されながらも、その「素養」は女子教育が求めるものとは異なっているという矛盾を孕んでいることが指摘できる。

このような「なほみ」の姿には、市川源三が著書『現代女性読本』の中で提唱した「新良妻賢母主義」を彷彿とさせるものを感じる。単に夫に従うのではなく、自分の意見を持って夫と対等に渡り合うためには、「なほみ」のような意識や姿勢は必要不可欠である。すなわち、「なほみ」は市川の提唱する「新良妻賢母主義」へと近づく可能性を秘めていると考えられる。

加えて、「なほみ」の言動には、女学生という立場を超

えた、一人の人間としての意思や考えの強さが伺える。だからこそ、年齢や性別、血縁関係を超えて他者に意見を伝えることができるのではないだろうか。「なほみ」は、「良妻賢母」になるための教育機関に通いながらも、その中で自分の意思や価値観を大切にしながら物事を判断し、行動する。この「なほみ」の姿に、夫に従順な妻という意味の「良妻」の姿や、家族のためだけに生きる「賢母」の姿は想像しがたい。

「なほみ」という少女の最も注目すべき特徴は、自分の意思で自由に物事を選択していくという点にある。そのため、「なほみ」の未来は、彼女自身が選んだ選択によって創造されていくことだろう。すなわち、「なほみ」は他者に押し付けられた「良妻賢母」像ではない「良妻賢母」像、自己の意思によって創造する新たな「良妻賢母」像を生きていくのである。『花日記』の中心人物である「なほみ」は、少女が自分の意思によって新しい「良妻賢母」像を実現していく姿を描いた作品なのである。

六 おわりに

本稿では、『花日記』の中心人物である「なほみ」について、女子教育論で語られる「良妻賢母」像と比較しながら

ら考察を図ってきた。女子教育改革運動の隆盛と退潮、そして従来の「良妻賢母」像の復興といった激動の時代に、『花日記』の「なほみ」が登場する。「気が勝つ」て「理性的」、自由に発言し他者との対等な関係を望む新しい「良妻賢母」像を体現する「なほみ」は、女学生という立場ではあるが、「優美高尚ノ氣風」、「温良貞淑ノ資性」、そして「従順さなどの婦徳」を兼ね備えた「良妻賢母」像に捕らわれずに生きる姿を提案しているという点で重要だと考える。

「なほみ」のような少女像は、川端康成の他の作品と比べるとどう捉えることが可能となるのか。言うまでもなく、『花日記』は中里恒子との「共同執筆」であるという先行研究が出ていることから、本作品が川端の意思によつてのみ書かれた作品とは言い難い。しかし、改めて川端の描く少女像や女性像を捉え直す時に、今回の考察が有効な手掛かりとなることは間違いない。その点も含めて、今後の研究をさらに深めていきたい。

注

- (1) 川端康成「解題」「花日記」(『川端康成全集 第二十巻』、新潮社、昭和五十六年十二月二十日、七三七頁下段)
 (2) 川端康成「四 昭和十三年九月十七日付 返子桜山仲町より信州軽井沢一三〇七川端康成・秀子あつ」(『川端康

成全集 補巻二』、新潮社、昭和五十九年五月二十日、二九五頁上段)

- (3) 川端「一 昭和十三年九月二十五日付 軽井沢一三〇七より神奈川県返子町桜山仲町あて(速達)」(前掲書、三〇三頁下段)

- (4) 孫美・金明哲「川端康成の小説『花日記』の代筆疑惑検証 Ghostwriter Verification of Yasunari Kawabata's Novel Hananiki」(情報知識学会誌28巻1号、二〇一八年二月二十七日、三頁)

- (5) 孫・金、前掲論文(十二頁)

- (6) 大森郁之助「増補 小説のなかの「エス」の世界」(札幌大学文化学部紀要比較文化論叢7、二〇〇一年三月三十一日、三八頁)

- (7) 大森、前掲論文(四二頁)

- (8) 大森、前掲論文(四二頁)

- (9) 今田絵里香「少女雑誌にみる近代少女像の変遷—少女の友」分析から」(北海道大学大学院教育学研究院紀要第82号、二〇〇〇年十二月、一四二頁)

- (10) 今田、前掲論文(一四三頁)

- (11) 今田、前掲論文(一二九頁)

- (12) 今田「〈資料〉『少女の友』掲載小説分類表」(前掲論文、一六二頁)

- (13) 今田、前掲論文(一四四頁)

- (14) 文部科学省「学制百年史 資料編」(二 高等女学校令の制定)

(https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/

- others/detail/1317627.htm> 二〇二一年十一月十日参照
- (15) 文部科学省「学制百年史 資料編」「高等女学校令中改正(大正九年七月六日勅令第百九十九号)」
 <https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318042.htm> 二〇二一年十一月十日参照
- (16) 水野真知子『高等女学校の研究(上)——女子教育改革史の視座から——』(財団法人野間教育研究所、野間教育研究所紀要第48集、二〇〇九年十月三十日、二七八～二七九頁)
- (17) 小山静子『良妻賢母という規範』(勁草書房、一九九一年十月十五日、一三五頁)
- (18) 水野真知子『高等女学校の研究(下)——女子教育改革史の視座から——』(財団法人野間教育研究所、野間教育研究所紀要第48集、二〇〇九年十月三十日)
- (19) 水野、前掲書(七二八～七二九頁)
- (20) 水野、前掲書(三一九頁)
- (21) 市川源三『現代女性読本』(明治図書、昭和九年二月十八日、一五四～一五七頁)
- (22) 市川、前掲書(一五八頁)
- (23) 市川、前掲書(一五九頁)
- (24) 東京都「東京都年表」
 <<https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/tokyo/profile/gaiyo/nenpyo.html>> 二〇二一年十二月三十一日参照
- (25) 水野、前掲書(三三二～三三三頁)
- (26) 水野、前掲書(七三九頁)
- (27) 水野、前掲書(七四〇頁)

参考文献

- ・遠藤寛子(二〇〇四年一月十五日)『『少女の友』とその時代——編集者の勇氣 内山基 本の泉社
- ・川端康成(昭和五十六年十二月二十日)『川端康成全集 第二十卷』新潮社
- ・深谷昌志(一九九八年三月一日)『良妻賢母主義の教育』黎明書房

付記

本稿における『花日記』の引用はすべて、昭和五十六年十二月二十日に刊行された『川端康成全集 第二十卷』によるものであり、旧字体は新字体に改めた。

また、今田絵里香及び孫吳・金明哲の論文にある「」は、原文のまま引用した。加えて、本稿では良妻賢母という言葉を強調するため、「」をつけて表記している。

(いとう・ひかる、創価大学大学院文学研究科
 人文学専攻博士前期課程)